
望み病

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望み病

【Nコード】

N4286J

【作者名】

燕

【あらすじ】

望み病。それはイヴとアダムの時代まで遡^{さかのぼ}り、現代の今私の目の前で終結される病気。それは、私が医者としてまだ未熟だった頃に出会った病気としては、あまりにも奇妙、奇天烈な病だった。

1 (前書き)

※今作品の主題である『望み病』とは、作者が捏造した病であり、現実には存在しないものとする。

医術の進歩により、多くの不治の病は治る病となって来た。医者である私にもそれはわかる。例えば老眼鏡越しの世界でしか、物を図れなくなってもだ。

これは、私の机の引き出しの中で眠っているとある病の話だ。

今から三十年前。白髪混じりの私の頭がまだ真っ黒だった頃の話だ。医学系列の大学を卒業してから、まだほんの数年しか経っていない時期だったと思われる。少なくともその時の私は二十代後半だった。

「重症患者が現れたら私に報告してくれ。それまで私は他の患者を診ているから」

聴診器を首に掛けながらその男は私に言った。確かその男は私より十は年上で、私がめでたく三十の誕生日を迎えたその数日後に脳梗塞で倒れて死んだ。今思えばあっけない死に方だったと思う。

職場では十年分先輩である男の言葉に私は「はい」と返事をし、頷いた。男は私の反応を見て満足げに笑った。屈強のない笑みだ。男はエタノールが入った瓶と脱脂綿、それとピンセットを白衣の腰にある大きなポケットに仕舞いこみ、最近入院した小さな子供のカルテを引き出しから取り出して部屋を出て行った。確か、車に撥ねられた女の子だったと思う。

1 (後書き)

ご観覧ありがとうございました。

暇潰しに書いていた長編が予想外の肥大化……。

気分転換に書いたものなので、全体的に淡い文章になっていれば嬉しいかと。

勢い良く病院の扉が開く。（その頃は自動ドアという便利なものはなかった）その時、私は冷め切ってしまった珈琲を飲むようにしていた。あまりの親の険相に、一瞬私はたじろいだ。が、すぐに聴診器を耳に付けながら、親の背にいる子の顔色を伺う。自分のこういう所はやはり医者なのだった。

「症状と、発症したときの時刻、それとしていた行動を教えてくださいますか」

まだ傷一つ付いていない自分専用の机の引き出しからカルテを一枚。母親のくしゃくしゃな顔は今にも泣き出しそうで面倒臭いと内心想ったし、父親は父親で随分と優柔不断な性格のようで、額に手をやりながら「あー」だの「うー」だの呻いていた。とりあえず患者をベッドの上に横たわらせる。

「……あの、息がしにくそうで。こうなったのは本当につききなんです。突然で……。それで、その時は私と一緒にテレビを見ていました」

「そうですか。じゃあ急性の病気かもしれません。脈拍が弱まっていますし」

青色のハンカチーフを顔に押し付けておんおん言っていた母親がふと顔を上げた。

「娘は……助からないのですか!？」

「まだわかりません」

ああやっぱ男じゃないんだ。と私は密かに心の中で呟いた。スポーツ刈りかと聞きたくなるほどの単発に、女としてはあまり褒められたものではない容姿。どちらかといえば男勝りな感じだが、幼児の男女の区別くらいきちんと出来る。

脈拍や患者の情報をカルテに書き込むと、私は先ほど重症患者がいたら呼べと言っていた彼を呼ぶことにした。数分ほどでやってく

るのだから中々律儀な男だ。

男は脈拍を見てから顔を顰め、子供の様子を見て更に眉間の皺しわを深くした。私は小声で「難しい病気なんですか」と男に聞いたのだが、男は首を横に振り、「寧ろ簡単な病気だよ」と苦笑いしながら言った。男は至極柔らかなで優しい声で両親に問うた。

「この子が疾患で倒れる前に、何か欲している物などはありませんでしたか」

両親はその質問に首を傾げたが、すぐに何か思い出したようで大きく甲高い声を上げた。

「青いリボンです！ コマーシャルの小さな女の子を見てあれが欲しいと！」

「……」

男は私に「青いリボンを至急買って来い」と耳打ちした。私は意味がわからず仕舞いだったのだが、娘が助かると知った両親は安心したようで、何度も何度も安堵の溜息を吐いていた。

私を買ってきた青いリボンを手にした患者はさも満足気に微笑んだ。さっきまで脈拍ぎりぎり、息も絶え絶えだったのが信じられない程に元気そうだ。私はその子の頭に青いリボンを結んであげた。両親もにこにここと微笑みながらそれを見ていた。少し不快だった。

人騒がせな患者とその親が去っていく背を見詰めながら私は男に尋ねた。「あの病は結局なんだったんですか」と。男は頭を掻いてから小さな声で言った。

「望み病。イヴとアダムの時代からの病で、ずっと昔になくなったはずなんだ」

「……はあ。私は聞いた事がないです。そんな病名」

「これは精神病の一つだね。人間の要求する心のブレーキが利かなくなってしまうんだ。だから欲しい物が手に入らないから悲しい、

みたいな憂鬱をほんのちよつとでも感じたら体が過剰反応して、心拍低下・呼吸器疾患を起こす。下手をすれば死んでしまうような病気でね。まあその時に本人が欲している物を与えれば治るのだけど。しかし完治する見込みがなくて、欲しい物がある限りそれが繰り返される。それによって積み重なったストレス、無欲になりたいという欲望から外からの通信を一切絶つ。最後には自殺してしまうんだよ」

「何でそんなに詳しいんですか？」

「昔大学で少し勉強したんだ」

長く言葉を発していた事に疲れたのか、男はふうと一息吐いた。それを見た私は、台所に飛び込んで新しいカップに暖かいコーヒーを淹れた。台所から見える男の背は少し小さくて、力のないものに見える。歳のせいだろう。この前三十代後半だと言っていたが。

「アダムとイヴというのは人間の始まりというか……まあそんな感じですよね」

文系関係の知識があまりない私は頭を掻きながらそう言った。普段は動物の体の中を見てばかりだから、アダムとイヴがどんな存在だったのか、よりもアダムとイヴはどんな体内構造をしていたのかの方がまだ上手く喋る事が出来る。ある意味良くない響きだが。

「そう。そしてアダムはこの世で一番最初に罪を犯した人間だった」

「エデンから追放されたそうですね。エデンは確か天国とかそういう類の……」

「まあそれはキリスト教とかの話になってしまっただがね」

窓の外を覗きながら目を細める男とは対照的に、私は時計を見た。窓の外は太陽が沈んだせいで真っ暗だし、時計はそれ相応の時間帯を示していたので別に問題はない。『深夜』というものを確認するために、お互いは自分が思う方法をしたのだ。これが人間の差というやつだろう。

「今日は月が綺麗だね」

「あ……そうですね」

時計を見ていた私は男が見ている窓の外へと視線を外した。雲に混じるわけでもなく、欠ける事もない美しい円形のフォルムを輝かせる月が私を出迎えた。しかし周りで輝くはずの星は一つ二つ程しかなくて、非常に寂しい夜空だった。まあ、都会人である私には常識の事なのだが。

「さあ、もう夜も深けたことだ。そろそろ家に帰るかね」

「え、先生は泊まらないのですか。明日の朝は早いですよ」

「いやいや、家近いから」

そう言って先生は去って行った。私はただ一人取残された気分になったのだが、今自分がすべきことを重々知っていたので、塞ぎ込む事はなかった。

私は出来る限り古ぼけていて厚みのある本を棚から下ろした。血のように赤い表紙には金の文字で『世界の病大全集』と記されていた。よくある名前だと嘲笑しながらその後ろのページを開く。そこで私は何度も何度も瞬きをした。索引ページにどっさりと綺麗な縦を描きながら並ぶ文字、文字。字のサイズなんてこれこそ広辞苑の辞書よりも小さい。私が抱きかかえないと持てない程の重さときさに、この繊細過ぎる小さな文字。引き出しから胡散臭い探偵が持つような大きな虫眼鏡を取り出しつつ、こんなもの見てしまつては将来自分は老眼になるだろうと心の中で泣いた。

索引には誰かが読んだ後がいくつも残されていた。赤鉛筆で×やら○やらかかれた病名達はどれもこれも私が知る由もない病気ばかりだった。

「青枯れ病赤星病……なんだこれ植物の病気じゃないか」

どうやら×がかかっているのは、植物や動物……哺乳類以外の生き物がかかる病らしい。さすが世界の病大全集。とりあえず私は『N』の欄にある病を隅々まで見た。脳炎、膿病……しかし望み病はどこにもない。ガセだったか。と思いたいのだが、朝来た患者を思い出してしまふ。あれは十分過ぎる程の証拠だ。

私は目頭を揉み解しながら、さてどうするかと思案した。とりあえず索引を適当に見直している所ですぐに手が止まった。赤鉛筆で色々と書かれている病名の項目の中に一つだけ、青鉛筆で囲まれた病気があったのだ。

「……希望病？」

病気の横には『精・重』と、青鉛筆で書かれており、見るからに神経質そうなその文字は先ほど病院を出て行った彼を彷彿とさせた。近くに転がっていたあの男が書いたカルテにも、ほぼ同じ筆跡の文

字が残されている。……まあ、特徴的な文字だからわかったというか何というか。

これほど古い本だし、今は望み病と言われているけど昔は希望病だったのかもしれない。私は希望病が書かれているページを開いた。その瞬間、粉のような白い煙が吹き上がる。私はごほごほと咳をしながらかその本を投げた。結構丈夫に出来ているのか、本は一回弾むとその場に項垂れた。

手術用のマスクとゴム製の手袋を装着してから私はまた本を開いた。ページの文字は埃によってほぼ埋まってしまうている。私は手袋をしたその手で丁寧に埃をどけた。

『希望病 … 別名 望み病』

その文字を見た途端に、ついに見つけた！ と私は歓喜した。埃のせいで充血し始めた瞳で文字を追う。男が言っていた事と同じような文が並び、病気の由来が明らかになった。

アダムの罪に憤怒した神が創成したという病

深い欲を疎むかのような病状から希望病と名づけられた

治療法は不明 病人の欲望を受け入れる事で一時の対処は可能

この病の存在を疑問視する医者も少なくはない

「……発病した患者にはいずれにせよ十年の間に死が訪れる……」

ごくり、と息を呑む音。私が発したとは思えないその後に、電話が鳴った。私はこの現状と電話の音を関連付けているのかわからないが、電話を取る際に指先に恐怖が走った。

「はい、市民病院センターですが……」

『病院の方ですか？』

ゴム手袋をしたまま取ってしまった受話器から聞こえる女の声に

は、落ち着きというものがなかった。息を荒くし、ヒステリックに上げられるその声だからこそ、最初は誰かはわからなかった。

『佐藤宗佑の妻です！ 佐藤郁恵です！』

「あ……お久しぶりです」

『夫が……！』

私は暫く息を吸うのを忘れた。声も出なかった。ただ、埃で乾いてしまった唇を薄く開いたり閉じたりするので精一杯だったのだ。

そしてその時初めて、この病院の薬品の臭いというものに気付いた。子供が嫌うあの臭い。私がずっと働いていた薬の臭い。ここは病院なのだ。生と死の狭間なのだ。

「……宗佑先生が……車に……？」

それから数日後。私が勤めている小さな病院の粗末なベッドの上ではなく、大きな大学病院の柔らかく綺麗なベッドの上で男は目覚めた。車に撥ねられた事での脳損傷、肋骨骨折。腕も複雑骨折していた。私が急いでその病室に駆けつけた時、先生はいつもの白衣ではなく患者用の淡い水色をした服を着ていた。頭に巻かれた包帯に腕を支える白い布。右頬に貼られた大きなガーゼ。

男は私を見ると、自分の手前に置かれていた皿を取って、私にそれを差し出した。

「林檎、食べるかね？」

私は思わず脱力した。

男の隣、包丁で林檎を器用に剥いていた女は私を見ると、手に持っていた剥きかけの林檎と包丁を置いた。男の妻であるあの女だ。

「お見舞いに来て下さって、ありがとうございます」と礼儀正しく振舞う姿からは、あの電話の声はとても想像できない。

「いやあ、真っ暗で信号機もずっと黄色点灯していたから、車も私もお互いの存在に気付かなかったんだ」

「……先生、大丈夫ですか」

「それがね、骨折してしまったのが利き腕でね。簡単な診療は出来るけど注射とか手術とかはもう無理だろうね。いやあ、昨日女の子に『車には気をつけてね』って言ったばかりでこれだ」

ははは。と気さくに笑う男を見ながら私は項垂れた。今私が勤めている病院にいる医師はもう私とその男しかないのだ。とても小さな病院だから二人で足りるのだが、たまに小さな手術オペもしなければ

ばならない。まだ私は未熟者だから、出来るだけもう少しこの人の隣で勉強したかった。

「先生、そういえば私、例の病気について勉強しました」

「何の本を見たんだい？」

「赤くて大きな本で……世界の病大全集とありました」

「そうかいそうかい。それは私が帰宅前に置いて行ったものでね。

昔はあれで勉強したものだよ。私の宝さね」

兎の耳を立てた林檎に爪楊枝つめようじを刺しながら先生は言った。私は思わず昨日投げてしまった事を謝ろうかと思ったのだが、踏み出せなかった。

「その病の患者は君に任せるよ。私ももう少し現役で頑張るから」

「あなた……！」

「大丈夫大丈夫。私は消毒作業とか、まあ簡単なのしかないからしゃくり、と先生は音を立てながら林檎の一つを齧かじった。私はその姿から、アダムが知恵の実である林檎を食べてしまった瞬間を密かに思い浮かべた。

男が退院するまでの約半年。大した病人は現れなかったが、頻繁に訪れる少女の姿があった。

少女は私の元へ現れる度に酷い息切れと、弱すぎる心拍を見せ、何度も何度も私を困らせた。まあまだ小さな子供のようだから、「宇宙に行きたい！」なんて難しい注文は子供が信じそうな嘘で誤魔化してしまったことも多々ある。最初はかなりの重症患者と見せておいて、欲しい物を差し出すとすぐにけろりとした顔で去っていく。ちよっと恨めしい存在とも思っていた。

「おはよう。大丈夫だったかね」

男が退院した。いつもの白衣の姿を見たら何だか心が軽くなったような気がした。私は男に希望病の女の子の事を全て話した。すると男はにっこりと微笑んで言った。「もうそろそろ来なくなるよ」と。

「何故ですか？」

「希望病はね、半年ほど発病したら五年間ほど休憩を取るんだ。そしてまた発病する。でもあれは本当は大人が発病する病気だね。あの子はまだ子供だから自分の病の事なんでこれっぽっちもわからないし、無欲になりたいなんて気持ちにもならないんだよ」

「面白い病気ですね、本当に」

「まあとても苦しいんだけどね」

先生が言った通り、あと数回ほどやって来たつきりあの子はやって来なくなった。あの子は今確か今年で十歳だと聞いたから、今度会うのは十五歳になってからだ。少しでも私は心の中で大人になった彼女に会うことを楽しみにしていた。

人間、歳を取ると年月が経つのが遅くなるという話がある。まあどちらかといえば『速くなる』の方が正しいようだが。……医者としてまだまだ未熟な私にとって、とても短い時間だった。男が車に撥ねられてから何年経った？ 四年……いや五年だ。

私は、屈強のない笑みを浮べる男をちらりと見た。男はずっとその顔をしているばかりで、皺一つ動かさない。少し咳を吐いてから私はまた握り慣れたシャープペンシルを取った。

私は三十になった。三十路と蔑まれるそれになった訳だが不思議と不快感はない。医者である私にとって、時が経ち自分の見た目が老いていくのは寧ろ都合の良い事だった。若い医者よりも、威厳ある年老いた医者を患者は選ぶのだ。そうそう、私がここに来た時はあの男が一人ぼつんと椅子に座っているだけで他に誰もいなかった。だから、手術の手伝いをしようと思ったのに、男は私にメスも鉗子も握らせなかった。そしてあの穏やかな声で、

「君が手術をすると聞いたら、患者はきつと嫌がるだろう」

私はその言葉を恨めしいと思ったし、憎いとも思っていた。

鏡に映る私の顔は少し皺が増えていた。威厳というものが出てきたようだ。……今思えば、あの時の自分は若かった。患者だって自分の身を切り裂かれてしまうのだから、相手を選びたいだろう。医者者の卵という事をむき出しな私に手術を頼むわけがない。今だって「私が手術を担当します」と言う眉間を寄せる患者がいる。まだ私は未熟なのだ。

男がまだ私に微笑みかけている。それが辛かったので、私は男をばたんと倒した。男の机の中にはもう何も入っていない。男のロッカーにも何も入っていない。男の物はもう何もない。

小さな黒い縁の中で男は笑っていた。

男は私が三十を迎えるのと引き換えに、お空へと還ってしまったのだ。そしてその時、私は『五年』の意味を履き違えていた。本当は『男が生きていた五年間』という意味ではないのに。本当は、『病が鎮まる五年間』だったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286j/>

望み病

2010年10月11日01時41分発行